

学 位 論 文 の 要 旨

専攻名	工学	ふりがな氏名	よこい ひろし 横井 浩志
学位論文題目	近代日本住宅における平面構成の分析に基づく和室減少プロセスに関する研究 A Study on the Process by which Japanese-style Rooms Have Become Less Common in Modern Japanese House Plans		
和室の消滅が懸念される一方で、多方面においてその価値の見直しがなされている。一例として和室文化をユネスコの無形遺産に登録することを目的に、日本建築学会において「日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会」が2016年に設置され、これにつづく「現代・和室の会」が2024年3月に設立しているほか、伝統的な工法や意匠を取り入れた住宅建築を紹介する一般誌・専門誌が近年継続して発行されている。 またタタミ敷き居室を和室と定義するのであれば、和室は格式性を示し接客空間として中世に確立し、明治後期に家族共用空間の茶の間も誕生するが、先行研究によると現在では格式を象徴する床の間をもつものが少数で、その用途も家族生活に利用される傾向にあることが指摘されている。 こうした和室の状況の変化はタタミを庶民が使い始めるとともに住宅の西洋化も始まった近代にあると考えられ、本研究では、大正期から現代にわたって和室の機能がどのように洋室（イス坐のイタの間）に移行し、その過程で和室がどのような位置付けに変容したのかの解明を目的とする。 第1章では、研究の背景、目的と意義、既往の関連研究と各章の概要について述べた。 住宅の西洋化を捉えるにあたり、同時代にプライバシーの確保や家族本位、家事負担の軽減を契機とした中廊下型住宅平面構成が成立しているが、これらを混同して捉えている既往研究もあり、これらを別事象で捉えるべきであることを、中廊下型住宅平面あるいはその形成過程にありつつ洋室をもつ洋館付加住宅を分析対象として第2章で示した。まず、洋室は中廊下型の各形成過程においても存在しており、いずれも座敷が続き間として計画され、茶の間の南面配置が少ない。また洋室で接客がなされたとして簡易接客に留まり、改まった接客行為は依然として座敷で行われ、家族の団らんも例外なく茶の間であったことを明らかにし、和洋両様式の接客領域が併存するという中廊下型の成立動機たる家族本位に逆行することから、別事象であることを実証した。 つづく第3章からは大正期以降における和室と洋室の関係から和室の変容を明らかにすることを目的とし、まず戦前における分析として住宅内に和室と洋室が混在し、且つ定量分析が可能な分析対象として住宅改良会機関誌『住宅』（1916～1943年）の掲載平面図を用いた。居室は座敷や茶の間といった和室中心で構成されており、洋室は1室ないし2室が主であった。また洋室の計画手法は、和洋室の接客空間を併存させるのが発行期間内一貫して主流であったことから、戦前は和室中心の生活そのものを変更していないことを			

明らかにした。

続いて戦後の変容を解明にするにあたり、第4章では、敗戦直後の住宅難の状況においても連続して住宅を紹介し、戦後日本の住宅像を示した婦人画報社『モダンリビング』誌（1951-1978年）の掲載平面図を用いて分析を行った。居室は、接客と家族団らんを兼用するリビング（あるいはこれに食事機能を加えたリビングダイニング）と居住者人数に応じた私的空間が洋室として、室名称では用途が不明な「和室」が和室として計画されたが、この構成で固定化しており洋室中心であるといえる。また設計者のコメントから改まった接客空間として計画された和室は26.3%にとどまる一方で、床の間や押入を備えるものもあり、寝室や来客の宿泊室など転用的に利用することを求められていたと考えられる。これに続き、より一般に近い傾向を示すであると考えられる新聞折込広告に掲載された全国分譲戸建住宅の平面図分析では、【1980】では和室が3室以上設けられる住宅が最多（44.4%）であったが、【2000】【2008】では『モダンリビング』と同じ居室構成であり、後追いしていると捉えられる。

さらに第5章では、戸建住宅に比べより一層和室の消滅が懸念される集合住宅について、全国で分譲されている2000～2019年竣工でインターネット不動産サイトにて販売されているものを分析した。まず和室をもつ住戸が43.3%に留まり経年的な減少傾向にある一方で、2016年以降は下げ止まりとも捉えられること、減少傾向も都道府県によっていくつかのバリエーションがあることを示した。しかし、和室そのものは年々小規模化し、配置からもLDKの従属空間化を指摘していることや床の間をもつものが1割未満であることも示した。

また、和室の利用実態を解明するための大分市中心部の集合住宅を対象とした住まい方調査では、来客の応対や食事、家族の団らんといった生活行為がLDKに移行し、和室が使われていたとしても多くの場合は兼用空間としてである一方で、来客の宿泊や家族の一室就寝の空間としての需要は依然としてあるほか、趣味や子育て、家事など多岐にわたる家族生活に利用されており、その転用性が評価されていると考えられることを明らかにした。

以上の研究成果を踏まえ、第6章では本研究の結論を述べた。

【1,985文字（語）】

（注）和文2,000字又は英文800語以内

続紙 有☐ 無☒

学位論文審査結果の要旨

専攻	工学 専攻	氏 名	横井 浩志
論文題目	近代日本住宅における平面構成の分析に基づく和室減少プロセスに関する研究		
主査	富来 礼次		
審査委員	小林 祐司		
審査委員	黒木 正幸		
審査委員	三宮 基裕		
審査委員	柴田 建		
審査結果の要旨（1000 字以内）			
本研究は、近現代の日本住宅における和室から洋室への転化とその減少プロセスについて、量的側面（和洋室数の相関）と質的側面（和室の室機能の変化）から明らかにしようとするものである。 研究の前段は、近現代の日本住宅の方向をけん引した代表的な住宅雑誌を取り上げ、平面図分析から洋室導入の経年的変化を捉えている。 まず住宅改良が主眼であった明治・大正期について、1916～1943 年発行の雑誌『住宅』掲載の 2,344 事例のうち和室と洋室を併せ持つ 1,140 事例を抽出し、その中から実際に建築された 861 件の平面図を分析し、①洋室の「付加」「置換」「分化」によって日本住宅の洋式化が進められ、②格式的な座敷は保持しつつ洋室の接客空間が設けられ、③家族共用の食事空間の洋室化（イタの間化）が中心であったことを明らかにした。 次に生活本位の住宅提案を目指した昭和期について、1951～1978 年発行の雑誌『モダンリビング』掲載の新築・増改築戸建住宅 3,182 事例のうち、和洋両様式をもつ 2,255 事例について平面図分析をおこない、とくに室名の変化に注目し、①接客空間である座敷の減少と代替空間としてリビングへ転化、②室機能を限定しない「和室」標記の登場を明らかにし、これに伴い和室の計画数が 1、2 室に収束することを明らかにした。 後段は一般の既存住宅を対象として、1980 年・2000 年・2008 年の戸建住宅の新聞折り込み広告から和洋両様式をもつ 20,034 件の平面図を採取・分析し、一般も同様の傾向であったことを示した。 さらに集合住宅での和室の減少傾向を明らかにするために、2000～2019 年に竣工・販売された 13,893 戸の平面図を分析し、①2008 年ごろから急激に和室を持たない住戸が増加する一方で、②2016 年以降は和室を持つ住戸が 2 割程度で下げ止まっていることを示し、加えて 100 件のインタビュー調査から和室の使い方を分析し、和室の転用性への評価とその需要が存在していることを明らかにした。 近現代の日本住宅における和室減少のプロセスを戸建・集合住宅の両面から膨大な平面図事例により分析し、実際の和室の使われ方分析から、和室の存在意義を示した点が高く評価される。また、学位論文審査や公聴会における質問に対して的確な受け答えと説明がなされた。よって、本論文は博士（工学）の学位に値するものと認められる。なお、最終試験の一部として英語の筆記試験を課し、十分な能力があることを確認している。			